

takefree  
+  
お気持ち♡

# またどこかでね

VOL.1



## それぞれの足湯

半田さんの思い出の場所は足湯  
温泉の街の中にある

ただ体を温めるだけではない  
いろいろな人と話をする場所  
コミュニティ・アートだとか  
かっこいい名前ではなくて

文字どおりの交流の場所

一日中いろいろな人がやって来る

お年寄りや若者、子供、仕事帰りの人

心もあたたためて帰っていく

その場所にも今はもう誰も来ない

人とのつながりをうばうもの、それは何か

みんなどこに行ってしまったのか

私は願う

それぞれの人がそれぞれの足湯をみつけ  
つかっていることを



とくしゅう：この地で こうして 生きてる

思い出の場所を詩にする

P. 1

関西への県外避難者生活ききとり

P. 4

Voice ～被災地は今 仙台市といわき市から

P.15

関西自治体支援窓口情報

P.14

関西避難者交流会情報

P.14,16,17

# 思い出の場所を詩にする

2012年夏から大阪市西成区にある「ココルーム」で、避難者の方、大阪の方とともに精神科医の宮地尚子さん著「震災トラウマ復興ストレス」の読書会を開いてきました。なれない土地で避難生活をどんな風に送っているかを宮地さんの描かれた「トラウマの環状島」を手がかりにして語り合ってきました。

離れなければならなかった思い出の場所、自分の記憶に残る場所について、詩にする会を行いました。詩人の上田假奈代さんをむかえて、「こたね」という手法で、二人一組でお互いの話を聞き合っ

て詩にすることをしました。人に向かって自分の話をして、詩の言葉にしてもらうことで、自分でも普段は感じることもない心の中の感情や思いを感じることできた時間になったと思います。そのときにつくられた作品です。(2012年11月12日@カマンメディアセンター)

## 夢の道

思い出の場所を話した人 Kさん（東京からの避難者）  
詩 思い出の場所を聞き取った人 小手川

自分の家からとなりの駅までの散歩道

雑木林を抜ける急な坂

昔有名な文学者も住んだという 武蔵野の面影

自転車ではのぼれないようなすこい坂をぬけると

駅前にはスタバもあるおしゃれな街がまわっている

ドイツのおもちや 天然酵母のパン屋さん

きらいなものがないでもない 夢の道

わたしのゴールデンルート

ここはわたしの好きな街

いつかお金をためて

家を建てられるだろうかと空想した

でも今は放射能のこともあって

そんなに大きなお金は払えない

帰りたけれど 帰る決意はできない

こちらではまだお気に入りの場所がみつけれられていない  
どこにあるんだろう？



# 羽石さんのアイスランドの旅

思い出の場所を話した人 羽石さん（茨城からの避難者）  
詩、思い出の場所を聞き取った人 假奈代さん

二〇〇〇年、24才だか25才だかの

羽石青年は

半年のヨーロッパ旅行のなか

アイスランド行きの安いチケットをみつけて

大好きなビョークの国

アイスランドに向かった

別の惑星

水色の惑星

北海道くらいの大きさの惑星

人口30万人の惑星

7月気温10℃の惑星

バズで一周ぐるっとした惑星

神秘の惑星

みずうみにうかぶ

水色のとうめいな

氷河

地面から湯がわきあがってきて

熱湯ふぎでる

間欠泉

道ばたに看板が立っている

数字は湯の温度

40℃くらいがいいね

旅をして羽石青年は変わった

ものに執着しなくなった

盗まれたら終わりだし

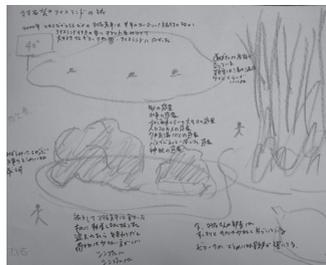
荷物は少ない方がいい

シンプルにシンプルに

今、羽石さんの部屋は

すっきりともものは少なく片づいている

ビョークのとうめいな歌声が響いている



表紙の詩「足湯」

思い出の場所をはなした人…

半田さん。いわき市から大阪に避難中

詩、思い出の場所を聞きとった人…

谷川さん。大阪在住。阪神大震災を経験

# とくしゅじ

この地でこうして生きてる

〜避難者生活ききとり〜

東日本大震災以後、住んでいた場所を離れて、関西に避難している方は大阪府だけで六〇〇〇人いるといわれています。(避難者登録している人数)。

関西への避難者の方に、こちらにきてからの生活についてうかがいました。どのように避難されて来たのか、生活上で困っていることは何かなど、外からはわからない面を教えてくださいました。

避難という非日常の中でも、生活を送る上では仕事や住まいはさけて通れませんか。そういった面をどうしているのか、そして健康の問題を中心にお話をぎきました。

ケース1 中村さん (仮名)

おかあさんと(三十八歳) ことも(小学三年) 母子家庭

――避難されてきた場所と避難先を教えてください。

埼玉県川越市から大阪市西成区です。

――自主避難ですか

そうです。避難してきたきっかけは、大震災後の、東京電力福島第一原子力発電所の事故です。

震災後、三月十五日に子どもと一緒に一時的に関西の方に移動しました。そのときに、前から知り合いだった西成区にあるNPO法人を訪れたところ、放射能汚染のことも心配だるうから、避難したいなら、できる限り援助します、といってもらえて。

そして、住居を提供いただく代わりに事業のお手伝いをすることになって、大阪市に引っ越してきました。特に公的機関にはたよっていないです。行政からの支援があればよかったのですが、頼りたくても、うちの場合は被災証明、罹災証明もないので申し込みができず、結果的にはすべて自分であるか、もしくは民間の方に助けていただく形になりました。たくさんの方に助けていただて、とてもありがたいおもっています。

――引っ越し後、生活費はどうしていますか

こちらに引っ越して来た当初は、大阪に仕事がある訳でもなく、貯金でやりくりしている状態です。それで困ってしまって、母子家庭なので、児童扶養手当を申請できるのではないかと思います、区役所に相談に行きました。埼玉では母や弟と同居していたから申請しなかったけど、子ども二人暮らしになるので申請できることになりました。大阪市の場合、母子家庭には交通費の半額援助があり、医療費の補助や、学校出の支出に対する補助もあるので、助かりました。

収入は、東京で働いていた時のついで、フリーライターの仕事をしていたのでその延長でわずかですが仕事があり

ました。インターネットとパソコンさえあればどこでもできる仕事があったのはとてもありがたかったです。仕事の依頼をもらったら、電話とメールで打ち合わせして、原稿を書いてメールで送る、ということをしていました。

また、受け入れてもらったNPO法人からもボランティアの謝礼という形で謝金をもらったのも助かりました。そのNPO法人に、二〇一二年はじめから正式にスタツフになることができたので、現在はその収入と、児童扶養手当、児童手当の収入があります。それらの収入で生活しています。

### ——収入はどのくらいですか

NPO法人からの収入が月八万円と、児童扶養手当が月四万一千円ほど、児童手当月一万円なので、月収約十三万円と臨時収入があります。

母娘二人で暮らすのには多い収入ではないですが、食事が職場でできるのと、生活に必要なものは、職場のバザーに集まったものからもらったりできるので、日常の生活面で不足になることはほとんどないです。

川越に帰るための交通費が新幹線往復で四万円かかるので、貯金から出したり、親に援助してもらっています。

でも、わたしはこうやって仕事をえることができてラッキーだったんだと思っています。働かなくてはいけないから、というはあるけど、避難者としてこちらにきて、子どもがいて働ける場がもらえたのはとても幸運だったと思っています。

### ——住居はどうされていますか

大阪に来た当初は、お世話になっているNPO法人が管理しているお部屋に住まわせてもらっていました。罹災証明のない自主避難なので、単に個人的に引っ越して来たのと同じなのですね。

避難生活が長期化してきたこともあり、引っ越しから約一年後の二〇一二年七月から、職場の近所に部屋を借りました。個人で借りているので、光熱費もいれて五万円ほどかかります。

罹災証明のある方や、警戒区域から避難された方は、市営住宅に無料で入居できることもあるようなので、相談してみようと思ったこともあります。期限付きだったり、職場から遠いのであきらめました。

### ——生活で困っていることはありませんか

いつになったら関東に帰れるのか、またこちらでの生活が長くなっているので、向こうに帰ってもすぐには仕事がないだろうから、先のことが見通せないことが不安に思います。

こどもは短期的な避難だと言ってこちらにきているので、とても帰りがたがっていて、その部分をどう納得してもらうかも悩みです。チエルノブイリのときに数年後に小児がんが増加したことなどを説明したりして、すこしずつわたしが心配していることを理解してもらっています。

こどもがこれだけ帰りがたがっていて埼玉県に帰ることが決められない理由のひとつは、こどもにたいする放射能の影響が心配だからです。こどもはとも川越に帰りがたがっています。大阪の小学校になじんでは来たものの、川越からの引っ越し当初、3ヶ月といつてきちんと友達とお別れもせずに来てしまっ

たままずるずると避難をのぼしているため、納得できていないというか…。

——お子さんの健康面で心配なことはありますか

最近では頭痛を訴えたり、呼吸が苦しくなったりという身体症状がでてきており、避難生活のストレスからなのではないかとそれも心配なのですが、それでも帰ると決められません。

福島県での子どもたちに対する甲状腺の検査の結果三割（四割の子どもに異常があったというニュース報道を聞き、不安が強くなりました。わたしたちはまだ甲状腺の検査を受けていませんが、早く受けたいと思っています。

また、低線量被曝の評価、内部被曝の評価が定まっていないことのも不安の原因だと思います。放射能の健康被害に関することは、専門的な内容であることもあり、わたしも当初はよく知らずにいて、少しずつ勉強しているところです。

内部被曝は、食べ物などから体に放射能が入ってしまうことですが、たとえば、国際的な機関のICRP（国際放射線防護委員会）と、ECRR（欧州放射線リスク委員会）でも、内部被曝に関する評価ははっきりと分かります。日本政府はICRPの許容量に準拠していますが、ECRRの基準の方が数倍厳しいものなので、どっちが信頼できるの？と。本当に埼玉県に戻って生活して大丈夫なのか？流通している食料品や日用品は安全なのか。確信が持てずにいます。

こどもは、川越では母と同居だったので、生活面の細か

いところもお世話してもらっていたのに、わたしはこらでも仕事が忙しいこともあって、二人だけの生活で、がまんを強いることが多く、先ほどのようにストレスが原因なんじゃないかと思う身体症状もできていて、専門家へ相談をしたほうがいいのか迷っています。こどもにこんなつらい思いをさせてまで避難生活を続けるべきなのか。実家の母親は、避難に反対はしていないものの、帰省するたびにストレスを募らせている様子の孫をみて、これ以上、大阪での避難生活を続けるのはかえって子どもにも悪影響があるのではないかと心配しています。関西地方には震災関連の子ども心の問題を扱う専門家がおおいのかもしれないと思いつつ、どこに相談すればいいのかわからなくて、困っています。

——これから先のこととは考えていますか

これから先どうするの？ というのは避難者の方とよく話す話題です。もう戻らない、と決めている方もいますが、わたしたちは最終的には川越に帰りたいと思っています。そのタイミングがいつなのか。ただ、帰ると決められなくて避難が長期化してしまっている状態です。



小学校へ登校する

## ケース2 加藤さん(仮名)

### 単身男性 二十九歳

——避難された場所と避難先を教えてください

東京都世田谷区から避難しました。関西、九州の知人の家を転々とした後、広島県尾道市の高根島に落ち着きました。

——避難した時期はいつですか

二〇一二年三月十五日の朝に東京を出ました。五月末に一旦戻って東京の家を引き払い、移住を済ませたのが六月初旬です。

——避難の経緯を教えてください

高根島に大阪の知人が借りている別宅があり、その時期は利用していなかったので一時避難先にさせてもらいました。

——避難直後の生活についておしえてください

まず東京の友人と二人で避難したのですが、その友人と親しい福島の一家を招き、高根島の家で共同生活をしました。一家は南相馬市在住で、夫婦と子供二人(三歳、〇歳)。小さい子供がいることでお互いに気を遣うことが多く大変な生活でしたが、持ち回りで食事をつくってテーブルを囲み、それぞれの苦しさを話し合うことはとても大事な時間になりました。

向いに住んでいる方が声をかけてくれて、事情を話すと近所の方々に伝わってゆき、いろいろな方が食料などを持って訪ねて来てくれるようになりました。人に助けられ、つながりができていく中で現地の情報も得ながら五月末までそれぞれに今後の生活を模索しました。

——現地ですべてやってしまいましたか

隣の生口島で、見慣れない僕たちの姿を見て声をかけてくれた商店主の方が、毎月行われている島おこし会議に誘ってくださり、そこで知り合った方から家を紹介してもらいました。以前町営住宅だったものを個人が買い上げて貸している物件で、家賃四万円のところをご厚意で二万円にしてくださいました。共同生活のメンバーはそれぞれにすまいを見つけ、ここからは一人暮らしになりました。

二万円を支払い続けることも難しかったので、さらに安く借りられる空き家を探しました。やはり現地で親しくなった方が、無料で住んでいいという空き家を九月に紹介してくださいました。徐々に掃除をして、引っ越したのが十二月です。

調べた限りでは、罹災証明のない自主避難では住宅に関する公的支援を受けることはできませんでした。

——現地での生活費をどのようにまかしていましたか

当初は、農家と海水浴場での日雇いのバイト、障害児日中一時支援施設でのヘルパーの仕事で収入を得ていました。いずれも不定期で、月収は合わせて四万〜五万程度で

した。二万の家賃と光熱費、携帯電話以外にお金が必要なことはほとんどありませんでしたが、さすがにこれでは不足でした。貯金は全くなかったため、友人から五万円ほど借金をしました。

十月から翌年三月までは広島県の緊急雇用事業で、尾道観光協会の仕事を得ることができました。被災者対象のものではありませんでしたが、現地の方の紹介で知ることができました。

半年間で四十万ほど貯金ができたので、その後は食糧の自給を目指して畑を始めた。尾道で出会った友人たちと仕事づくりを計画したりしながら、無職で貯金を切り崩して生活しました。

#### ——避難生活のゆきづまりとどんなものでしたか

僕は精神障害と発達障害を持っていて、一般的な就労ができたことはほとんどありません。震災前の数年は生活保護を受給していましたが、移住の際に世田谷区から尾道市に移管することは認められませんでした。生活保護受給者が自己都合で転居することは認めていないからだそうです。尾道市で新たに申請することは可能でしたが、給付抑制が叫ばれる中で、まだ若い自分が小さな地方都市で受給することはまず無理だろうと思い、申請しませんでした。ただど田舎でなら、食糧を自給しながら必要最低限の現金を得るための仕事を自分で作り出す、という暮らし方ができるのではないかと考えて、緊張雇用終了後に実践してきました。しかし畑はそれなりにうまくいったもの、お

金になる仕事をつくり出す目処は立ちませんでした。精神的に追い込まれてゆき、二〇一二年六月〜七月はうつ状態で寝込む日が多くなりました。

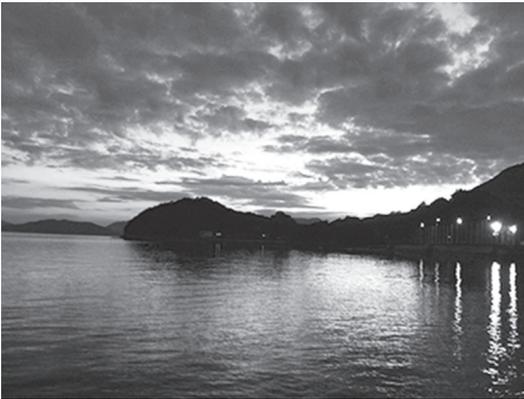
#### ——避難先を移動することを決めた経緯を教えてください

生活の見通しがまるで立たず、とにかく気分を変えたくて八月に大阪へ行き、何度かお手伝いをしたことのあるNPOを訪ねました。NPO法人に関係している方に行き詰まりを話したら、ここで働くことを考えてはどうかと言われました。小さなNPO法人なので雇ってもらおうということは考えてもいませんでしたが、代表に相談したところ、やってみようと言ってくれました。ずっと憧れを持って関わってきた場所だったので、迷わず移動を決心しました。

#### ——今の生活についてはどうですか

勤めているNPO法人は経営基盤がとても弱く、いつまで働くことができるかはわかりません。もとより働いて生活費を得ることは不安があるため、今、障害年金の申請をしています。昨年アスペルガー症候群と診断され、それなら年金を受給できるはずだと精神障害当事者団体の知り合いから聞いていました。住んでいる西成区は労働のを中心にした様々な問題が集中している地域で、それだけに社会保障を得るための支援のネットワークが発達しています。支援NPOに相談すると適切な病院を紹介してくださり、役所の関連窓口とも素早く連携し、スムーズに申請することができました。申請が通れば月額六万円ほどを受給できます。

職場でもさまざまな支援団体の方や、一般的な労働観にとらわれない新しい働き方を模索している人たちとの出会いが多く、そのようなつながりの中で自分の生き方を見つけていけるのではないかと思っています。



広島時代の写真

### ケース3 広田さん（仮名）

#### 単身男性三十八歳

——避難してきた場所と、避難先を教えてください。

茨城県土浦市近くから大阪市に避難してきました。

——被災されたときの状況を教えてください。

三月十一日は、東京の友人のところに出かけて来ていました。家がどうなっているかとても心配でしたが、常磐線がとまっていたのでしばらく帰ることができませんでした。十日ほどして帰ろうと思っても、家の近くまでは通っていませんでした。仕方がないので、途中の駅から家まで八時間くらい歩いて帰りました。家は半壊していて、車も完全に壊れている状態でした。

避難所に行くことまで頭が回らず、半壊した家にそのまま住み続けていました。とにかく家を片付けてきちんとしていないと、という気持ちが強かったです。庭中に瓦が散乱していたりとか・・・車の処分もしないといけなくて、知り合いに頼んで廃車手続きをしました。その間も、茨城県は大きな余震がありました。せつかく復旧した電車が止まってしまいました。特に明け方に余震が続いたので、何度も目が覚めて眠れなくなりましたのを覚えています。

——大阪に避難してきた経緯を教えてください。

会津若松で避難者の受け入れをしてくれるというチラシを見て、そこを考えていたこともありました。大阪にはそ

の当時交際していた恋人がいたので、その人が大阪に来たらどうかと誘ってくれて。東京を考えていたんだけど、福島からの避難者の方が多くて、茨城県からの避難が難しい感じでした。茨城県を離れることは正直悩みました。田舎暮らしをしていて、都会にもなれてないので知らない土地で暮らすことに不安もありました。

七月に、大阪市役所に連絡したら、大阪市災害対策本部に つないでもらいました。茨城県で家が半壊していることを相談したところ、そのときに審査をしてくれて受け入れてもらうことができ、一週間後に大阪に来ることができま すか、ときかれました。

### —— 現在、大阪での避難生活はどのようにされていますか。

震災前の二〇一〇年五月ごろから、仕事のストレスで体調がおかしくなり、うつ病と診断されました。大阪に来た当初も、うつ病の治療中だったので、生活保護の受給を考 えていました。九月から十二月までは仕事に就くことがで きたのですが、就職中にだんだんと病状が悪化して、もう これ以上働けない……という状況でした。大阪に来てから、 どの病院にかかっているのかもわからず、治療もできてい ませんでした。とてもつらい状況でしたが、在職中に生活 保護の申請にいったら三回ほど断られてしまいました。

その後ついていた仕事も終わり、貯金を切り崩しながら 生活を続けました。困っていたのですが、たまたま今年の 一月に司法書士の方に相談する機会があり、困窮者の生活 支援を行っているNPO法人も紹介してもらうことができま

した。その方についてきてもらって再度生活保護の申請を おこなって、受給することができました。そこで、メンタルクリニックを紹介してくれてうつ病の治療をはじめること ことができました。

大阪に暮らしているうちにさみしさが強くなってきまし た。高速バスをみると、乗って帰りたくなくなりますね。

### —— 生活上で困っていることはありますか

今、自己破産のための手続きをしてもらっていて、それがいつ終わるのか不安な気持ちです。茨城の自宅、被災して半壊した家と、壊れてしまった車のローンが残っていたのですが、もう払いきれないので、司法書士に相談して、自己破産する方法をとるようになりました。今は、その手続きをしてもらっているのですが、家が無事に買い取りがあるか心配ですし、いつかいつか手続きが終わるのか、なかなか手続きが終わらず、落ち着かない不安な気持ち があります。

生活保護をもらって生活ができていますが毎日ですること がなく、避難者の交流会にいったも友人もできなくて、早くなにかしたい、仕事に就きたいという気持ちがおきてきて、自分は何をやっているの だろう、と悩んでしま います。



震災前の茨城の家

ケース4 池田さん（仮名）

おかあさん（四十歳） 娘（十四歳）、息子（十一歳）

母子避難

——どこから避難してきたかと、避難先を教えてください。

神奈川県小田原市から、奈良県香芝市です。

——避難の経緯はどのようなものですか。

二〇一一年十月に、横浜でマンションの屋上からストロンチウムが検出されたんですね。それまでは、原発事故後の放射能汚染のことは気になってはいたけど、小田原市にしようと思ってた。でも、そのニュースを聞いて「あ、もう関東はダメなんだ」と思ってしまった。事故前に、原爆被爆のことを調べていて、ウランやストロンチウムなどの放射性物質についても知識があったので、そのニュースを聞いて、「引越さなくては」と考えるようになりました。その時は本当に落ち込んでしまつて、「子どもたちはこのままでは数年後には死んでしまうかも」と思い詰めて、毎日パソコンで情報を集めて、中毒みたいだつたと思う。

子どもたちや自分にも体調の変化があつて、息子は鼻血をだしたり、自分も月経の量がどんどん増えていつて、肌がおかしくなつていった。大磯にいた友人が、先に家族で奈良県に引越していたので、その人を頼つて奈良県に避難しよう決めて、十月にどんなところかみてみようと思つて、呼吸がとても楽になつて、体調も楽になりました。それで、二〇一二年二月に現在の家に引越してきました。

——母子避難していることには夫はなんといつてますか。

夫は、子どもたちを避難させることには賛成してくれていますが、でも、自分がこちらに来ることは考えていないみたい。昨年ストロンチウムのニュースを聞いてから、わたしは毎日のように「ここに住んでいては危ないんじゃないか」という話はきいてくれて、わたしの危機感にはきちんと向き合つてくれてたんだけど……。

小田原では休耕地を借りて家庭菜園をやり、畑と田んぼがあつて、畑の土からは一〇〇ベクレル、とれたお米からは精米してからも3ベクレルの放射能が検出されました。近くのお茶畑からは（1Kgあたり）五〇〇ベクレルが検出されて出荷規制にもなつたので、確実に放射能がでているのは夫もわかっていると思う。

わたしは、避難を考えてから、彼も一緒に来てくれると思ひ込んでいたけど違つたんですね。夫はちよつと精神的に不安定なところがあつて、これまでいろいろな仕事をして来たけど、職場で人間関係を取り結ぶのが難しくなると、うつ状態になつて仕事を辞めてしまふ、というのを繰り返して来たのね。

わたしは、結婚以来十五年、それを支えて来たと思つてたんだけど、わたしひとりが親で子どもが三人のような家族になつていたと思う。あの人もそれが心地いいからわたしに頼つていて、そういうことは震災が起つてからわかつたことだけ……。

引越しの話をしたときに、夫から「自分の人生は失敗

だった。君についていたらもつと失敗する」といわれました。彼は、これまでもわたしは何でも決めてしまう中でわだかまりもあつただろうし、かといって自分の意志で「こうしたい」ということもなく、人のせいにしてしまうところがあるのだと思う。わたしも、もつと怒ればよかつたんだけど大人ぶって、「わかつた。だつたら離れて暮らしても、わたしががんばる」といつてしまつたんです。

それで、家探しから、不動産屋との手続き、荷造り、荷解きは全部一人でやりました。夫からは「手伝わない」と突っぱねられた訳ではないけど、なんとなくそうなつてしまつた。父がトラックを借りて来てくれて、そうしたらそれが平台のトラックで、タンスや家電のような家財道具が全部むき出しで、そういうのにブルーシートをかぶせて、そのまま奈良まで高速道路でいつて、なんだか変な引つ越しました。

奈良に引つ越して来たら、ものすごく寒くて前歯が浮いてしまつて、歯医者に診察にいつたら「前歯の神経が死んでます」といわれました。「どこかにぶつきましたか」といわれたんだけど、覚えがなくて、歯医者さんから「精神的ショックで歯の神経が死ぬことがある」といつていわれて(笑)。そのことで、自分のがんばりすぎてたんだ、と気づきました。なかなか治らなくて、大変でした。

——仕事はいつはじめられたんですか。

訪問介護の資格をもつていたので、大阪市内で仕事を探し始めて二〇一二年四月から働き始めました。収入はわた

しの仕事が十二万円で、夫からの仕送りが月に八万円、十万円。それでなんとか親子三人でやりくりしています。本当は働きたくない気持ちもあつて、仕事も大変だけど、自分に収入があつた方が安心だから…。

仕事は大変です。でも、いい出会いもあつたと思う。関東からこちらにきて、介護される人たちが、もつと人間性がむき出しのような感じがします。こちらで出会つたお年寄り、障害がものすごく重くて、痛みも毎日あるような人、そして地域的には貧困の色も濃いつところだと思ひますが、それでも「笑つて生きなきゃ損だ」と言つてですね。本心はもつと苦しくて、生きるのがつらいと思つているのかもしいないけど、私たちに見せる面ではがんばりたい、楽しみたいという姿を見せてくれるんです。それは、いい意味で大きな驚きでした。

——両親は避難についてどう思っていますか

わたしの両親は、反対はしてないけど、「もともと変わり者の娘だからしょうがない」と思つているみたいです。弟と妹がいて、ふたりともうちよりもつと小さい子どもがいるから、「一緒に避難しよう」と誘つたけど、全然危機感がなくて、身内の方がかえつて言いにくいんだな、と気づきました。

夫の両親は全く理解がなくて、「精神科につれていけ、頭がおかしいといわれたり…。多分今でも思つていいるんじゃないかな。夫はそれには怒つてくれて、反論してくれているから、その部分では意見の違いはないです。

でも、一緒に避難するのは彼にとつては「失敗」なんですね。こどもが二人いて、失敗だった、ってなんなのだろうと思うけど、本人は言った後はケロッとしていて、「がんばってね」と言うんですね。たぶん、ずっと「俺ってだめだな」と自己否定しながら生きてきて、わたしが「関西に引越す」と言い出したときに、その気持ちが飛び出してしまったのではないかな。

夫との関係は、将来的な展望はないのですが、彼も一人がんばっているようです。今まで、わたしがやっていったこと、例えばクリーニングに服をだすとか、自動車保険の書類をかくとか、そういった日常の細々したことを、やらないといけないんだ、とわかってきたようです。

わたしも、彼と一緒にいるときにイライラすることがあった。父親として当然してくれると思っていた部分、こどもに愛情をかけるとかもっと関心をもつといったことが、わたしが期待しているようにはいかなくて不満があったと思います。

だからひよつとしたら、今のようにはなれて暮らしているのはいいバランスなのかもしれないです。ただ、息子が思春期になったときに、父親の存在が必要だと思うので、それが少し不安です。

——震災をきっかけに、夫との差異があらわれてしまったことについてどう思いますか。

夫との関係だけでなく、友人や身近な人との関係で、こんなにも感情的になつて怒られたり、「頭がおかしい」と

言われたりするの、原発事故の被害だからなのかと思うんです。人と人は、意見が違うことは当たり前にあるけど、だからといって相手をののしったり追及したりはほしくないでしょう。

避難のことは、一緒に田んぼをやっていた人の中でも、わかってくれると思った人にだけ伝えただけで、「小田原が嫌いになったのか」と問いつめられてびっくりしました。そこまで人に意志、決断を否定される、というようなことは今まで経験したことがなかった。言った人は、不安なんだけど、不安で思いたくないという気持ちが働いているのかな。「逃げるなんてずるい」と思っているのかも…。

どうしてそうなるのか、わからなくて、自分の中で全然消化できていないです。どうしてそこまでいえるんだろう。これまで親しいと思っていた人がそこまで豹変してしまうのは、原発事故以外には感じたことがないから、それがなんなのか、まだわからないです。

うちの他にも、小田原から奈良に避難して、農業をやっている家族がいて、その人のもとに東京から来た人と話したら、「避難して来た人は、残っている人のことを悪く言わないけど、残った人は出て行った人に対して本当にひどいことを言っている」と聞いて、とてもショックでした。

「なんでだろう、やっぱり自分も避難したいのかな…」って思つて。わたしは、本当にお金もないし、でもそれよりも優先したいことがあるから避難したけど、わたしよりもずつと収入がある人が「お金がないから引越せない」と言っているのを聞くと、優先順位が違うのかな、と思いま

す。  
どんなに貧しくなっても、子どものことがあるから無理して引越して来たんですね。

—— 多分、その人たちもどこかで心配な気持ちがあるからそういう態度になってしまっているでしょうね。でもそれはその人たちの責任ではないですよ。福島の知人は、東京の友人から「どうして避難しないのだ」と責められるといっていました。農家を続けていることを「毒をばらまくのか」と言われてしまつと。うらな話ですね。

そうですね。本当はみんな被害者なのに、そういう風に分断されています。本当は、そういうところで争うべきではないですよ。そうやって違う立場の人間同士が対立していつてしまっています。

それがなんなのか、まだわからないですよ。なんでなんだろう。



## 関西避難者交流会情報

### 放射能から子どもを守る会・高槻

高槻のお母さんを中心とした放射能の問題に取り組むグループが、月に一回、避難者の交流会をひらいています。原則として毎月第4日曜日に、「出屋敷公民館」（高槻市上田辺町4-19, JR 高槻駅南口から徒歩5分）で午後2時～4時。  
(ブログ：<http://takatsukikodomo.blog.fc2.com>)

## 自治体の被災者支援窓口

### 大阪市東日本大震災被災者支援総合窓口

大阪市役所 5階 危機管理室内震災支援対策室事務室

〒530-8201 大阪市北区中之島1-3-20 (御堂筋線淀屋橋駅1号出口)

(電話番号) 06-6208-8841 (受付時間) 9時から17時30分 (土曜・日曜・祝日除く)

- ・住宅にかかる相談・あっせん (市営住宅等)・福祉援護施策の相談
- ・学校等に関する相談・大阪市への避難されているかたの生活全般に関する相談
- ・日本赤十字社からの生活家電の提供 (生活家電のレンタル) の受付・問合せ

## 京都市震災支援総合案内コールセンター 0120-776797

京都市へ避難している方、これから避難を考えている方の、市営住宅や民間提供住宅等への入居希望のお問合せ、転入の手続等のお問合せ、京都市で生活するうえでの支援・医療・税・保険・雇用のお問合せに対応します。

# Voice

## ～被災地は今～

### 1 仙台から 桐畑未来

原発事故後間もなく、当時1歳3ヶ月の子どもと共に夫の実家のある大阪へ避難。実家は宮城県。父方は岩手県。

この十一月のはじめ、震災後一度も帰っていなかった仙台の実家に帰って来ました。

祖母が九十歳近くなりいろいろ心配になってきたのと、私が子どもの頃に通っていた保育園の四十周年の祝賀会もあり、3.11の後という節目とも重なり、意を決して関ヶ原・関東・福島を越えて行きました。地の駅周辺や実家の中は心配していたよりも線量が低く、胸を撫で下ろしました。

「海岸行ってみる?」

母の一言で子供の頃よく泳いだ浜に行ったら、全然知らないところになりました。

思い出の中のそこは、松の林が繁り、「こんなところに住めたらよいな」と思わせる緑の生け垣に囲まれた家々や公園の木々、堤防を超えると砂浜と太平洋が広がる、夏の日差しの中で全部が燦々としています。

今は、がれきはすっかり片付けられ、賽の河原そのままに荒涼とした吹きさらしの海岸に所々夏草が枯れかけてました。



仙台の海岸で

塩水の影響で草はほとんど生えなくなっていました。公園のあった辺りや、ずーっと続いていた砂浜はあちこち陥没して池になりました。堤防を越えて海まで駆けていった浜・・・海と、堤防のあったあたりの間に、行く手を阻むように大きな池ができていました。何本が残った松の枝は遥か頭上あたりだけが残り、ボキボキと折れたり引きちぎられた枝が「津波はここまで来たよ」と語っています。「：：：恐山には風吹くばかり・・・」。そんな寺山修司の詩が脳裏をかすめます。ところどころ残る門柱や土台うなぎの養殖場跡などが、そこがかつてひとの営みがあったことを伝えていました。そんな一画に、やはり賽の河原みたいに行くつも石や燈ろうを積み上げてあるのが見えました。「慰霊塔だろるか」と近づいてみると、ちよっとした広場があって、ガラス戸や窓を組み合わせて雨風をしのげるようにした、腰をかかめないと入れないようなあばらもありました。側で七十歳台半ばのおじさんが、座って一服していました。そこはおじさんが住んでたところで、石などは近所の大工さんなどが集めて、慰霊棟みたいに焼香台も設けてあり、時々人が訪れてはお線香あげて行くそうです。

「去年なんかはそれこそ大阪だとか熊本だとか、遠くのナンバーもいっぱいあったけども。今年はいよいよ減っ

たげどな〜」

「入母屋造りの百年住める家建てたんだけど、二十年で流さった（流された〜）」

「ああ、今日はこんなく風強いからお線香はあげなくていいよ」

おじさんは、ほげ毎日通ってるそつです。最後に思わず握手をしたら、

「十年後もっぺん来てみな〜。すっかり変わってつぺから。工業地帯にするんだ」と、少し寂しげに教えてくれました。

ガラス窓を組み合わせて作ったあばら屋の屋根には黄色い小さな旗が二つつはためいて、エンジンをかけながら母がポツリと

「『ここに帰りたい』って意味なんだよね…。」

あの黄色いハンカチ…」  
この浜をずっと南に行くと、さらに被害のひどかった閑上に辿り着きます。そこでは幸せの黄色いハンカチになぞらえてたくさん黄色いハンカチや布を飾る「黄色いハンカチ運動」があるそうです。

「いつかここに帰りたい」という願いと希望を込めて。

私はとうとう『復興』という言葉が嫌いになりました。

がれき処理を急ぐ意味や、いのちの防波堤にしたがらない理由もピンと来ました。まして岩手は小沢一郎の膝元。小沢さんと言えば土建屋さんとおべつたりです。

おじさんは津波で家を持って行かれてしまいました。子どもさんやお孫さんたちが戻って来たときそこが工場になってしまっていたら…。知事さんは、震災後間もなくから山を削り、高台移転する大規模土木予算を国に提出していました。大企業を誘致しようとして地元の漁師さんたちと揉めに揉めたりしています。

工業地帯になる？

眼前に浮かんだ十年後の無機質な海岸・・・私たちは二度故郷を失うことになる。

大きな企業は、採算が合わなければあっさり撤退していくでしょう。地元の人たちを



## 関西避難者交流会情報

まるっと西日本 (HP : <http://marutntonishi.jimdo.com>)

東日本大震災県外避難者西日本連絡会。避難者のためのボランティアグループで、避難者、避難したい人のための情報をつめたサイトです。各地の交流会や避難者支援イベントの情報がたくさん掲載されています。MLに登録できます。

避難ママのお茶べり会 (HP : <http://hinanmama.jimdo.com>)

東日本大震災の影響により東北・関東などから関西へ避難してきた母親自身が作った避難ママを支援する為の自助団体。避難ママ向けMLがあります。

堺市のなかもず駅近くの会場、ドーンセンター（大阪府立男女共同参画・青少年センター、天満橋）、クレオ大阪などで避難ママの交流会をおこなっています。

使い捨て、置き去りにして。後にはシャッター工業地だけが残るのでしょうか。二度目の津波みたいにみんなの営みを壊し去っていくのでしょうか。

海にはまだ見つけられずに眠っている人たちがいる。そんな海が汚されて騒がしくなっていくんだらうか。

海水浴場の、たくさんの子どもたちや大人たちが笑いさざめく騒々しさとは全く異質のざわめきで。

漁師さんたちを始めそこで暮らすひとたちは地域を大切に、海を大切にしてきました。海のために山も大切にしてきました。それは海に生きる多種多様な生き物たちを、そして海そのものを、私たちの子孫のそのまた子孫の、ずーっと未来を守る営みでもあります。

自然と共にあってゆるやかに津波から守ってくれるいのちの森。

放射能汚染すらも包み込みながらそっと「津波はここまで来たよ」と後々まで伝えてくれる防波堤。

沖繩の摩文仁の丘のように慰霊碑があつて、いつか誰かが偲びに来てくれるところ。そして、魂たちが帰ってくる場所……。現世に生きる者たちと彼岸の者たちが憩えるところ。思い出の海岸線、いつかまた帰れたら、そんな防潮の森(\*)を蓮に見せたいし、ずーっと先の未来にも残して行きたいのはそんな風景です。

今何が自分にできるのかわからないけど、一粒一粒、よい種をまいていきたい。

#### \*防潮の森

世界的な植物生態学者・宮脇昭氏（「木を植える男」横濱国大名誉教授）提案。震災がれきは焼却せずに土とゼオライトを混ぜて沿岸部に埋め、そのときに鉛やコンクリートなどで放射能の漏出防壁も施し、常緑広葉樹を植えるというもの。（落葉樹では落ちた葉で土壌が汚染される懸念があるため）



## 関西避難者交流会情報

### cafe IMONIKAI

大阪社会福祉協議会大阪市ボランティアセンターが毎月1回ひらいている避難者交流会です。毎月、東北と大阪をつなぐ情報誌「いもにかい」を発行して、避難者向けや被災地の情報を伝えてくれています。 Tel : 06-6765-4041

### ほっこり通信 from Kyoto

京都で福島県からの保養キャンプを企画しているグループの出している通信です。住まい、仕事、子育て、健康をテーマにして、充実した情報とボリュームで、避難者に必要な情報が網羅されています。

(HP : <http://ameblo.jp/hokkori-kyoto/>)

## ～被災地は今～

# Voice

## 2 福島県インタビュー

福島県いわき市で、被災経験の聞き書きをつづける藤城光さんに、現地の生活についてお話を伺いました

——今の、いわき市での生活の様子を教えてください。

震災の直後からですが、大きな災害があるとそれに対するアクションの差が出てしまいますよね。放射能に対しては、特にそれが強く出てしまうように感じます。ものすごく微妙なところで、差が出てしまう。食べ物で、ここまでは食べるけど、これは食べない、というような線引きで、例えば放射能汚染が強く出ているきのこは食べないけど、ほかの福島産の野菜は食べる、といったような個々人の判断があつて、その微妙な差が対話の壁を生み出しています。

水道水も飲む人、飲まない人がいて、飲む人から見ると飲まない人は「ちよつと神経質なんじゃない？」と思われてしまう。そういった判断のバランスがみんな微妙に違うので、「去年の秋くらいから、他の人に食べ物のことで相談できなくなつてしまいました」というお母さんの声を聞きます。これまでは周りの人とも情報交換していたけれど、だんだんと微妙な判断の差が出てきて、相談したいけどその話題には触れない、というようになってしまつています。

いわき市では、農家から出荷する時点で作物の放射能測定をするので、「これも（放射能は）出てない、あれも出てない、それなのに食べないのは風評だろう」という人もいます。福島県では、全袋検査も実施しているし、むしろ他の地域できちんと測定せずに流通しているものよりは福島県産の方が（調べているのだから）安全だ、という意見の人もいます。

他のことでは、原発から逃れていわき市に避難して来た人と、地元の間での溝が深まつてしまつています。原発立地地域に住んでいた人は、原発を誘致したことによる恩恵もあり、恵まれた暮らしがあつたのです。そういう生活文化の差が日々の生活で出てしまう。これも微妙な話なのですが、ゴミの出し方でものすごく紛糾してしまつたりとか。、「ゴミくらいで」と思うかもしれませんが、そういう細かい部分での溝が市民感情に影響を与えている現状があります。

「浜通り」と呼ばれる海側の地域でも、いわきより北の地域は、もともと福島県の中では産業も少なく、原発を誘致した人たちも町民のため、地域のためにと考えていた部分もあつたはず。そのお金によつて地域が潤っていたのも事実なので、避難して来ている人の中で「事故のせいで自分たちが移動しなくてはいけなくなつたことも、あまり文句はいえないんだ」と思っている人もいます。そういう話を聞くと、本当に複雑だな、と思つてしまいますね。

同じ福島県に住んでいても、人々の状況はかなりバラバラで混沌としています。そういう状況は、国が、被災者が一致団結しないようにわざと作り出しているんだ、と疑心暗鬼になつてしまつている人もいます。そのように人々が微妙にずれた状態になると、結果的にそこにある問題の焦点がぼやけてしまつてしまいますね。わたしは、避難していった人がどうやって暮らして来たのか、ずっと気になっていました。心配していたのですが、聞き取りに行きたくても、（いわき市の）周りのことだけで精一杯になつてしまつてしまうというか。大阪に来て、

こうして避難して来た人に出会えて、良いつながりができた、と思つています。福島をはじめ、地元からはなれた人もどまつている人も、お互いのことをもつと知る必要があると思います。自分の身近な所だけをみていると、視野が狭くなつてしまいがちなので。

周りの人をみていると、前向きで元氣そうな表情の裏で、無意識に疲れやストレスをつみかさねている人が増えているように感じます。福島に住みつづけている、というのは何かしら矛盾した感情や疑問を感じながら生きることでもあり、全くの平気で住んでいる人は、おそらく一人もいないでしょう。経済が通常に戻りつつあるので、元々住んでいた人々の多くは戻りましたし、慣れ親しんだ場所やコミュニティの中で住み続けることを選択した人、また住まざるを得ない人、様々な理由でここに住んでいる人は大勢います。

しかし、収束をしていない事故現場の側という立地でもあり、被爆を気にしながら生活せざるを得ない場所で生きる事は、慣れてはいきませんが、どこか緊張をはらんでいます。家族が離れて生活している人もたくさんいますし、そういつた状況にいて、どこかでつじつまを合わせながら生きてるので、ゆがみが出てしまう部分があるというか、それは、当然の反応でもあり、そういつた姿を見ると、つらいですね。

「もうこんな苦しみは十分」と思うんです。もうこれ以上、こんな体験を味わう人は増えないでほしい、と。だから、いろいろな被災の様子を取材してのせていますが、「こんなに苦しいんですよ」と訴えるためのものではなくて、もうこれ以上繰り返されないために、また、「何故こういうことを言っているのか、こういう行動をとるのか」その言葉や行動の背景の部分を丁寧に聞いて提示していくことで、少しでも理解に繋がるような素材として提供できたらという気持ちがあります。

—— デモのように、権力に対して意見を表明するのも大事だけど、わたしたちが分断されることがとても大切だと感じています。

デモなどの抗議行動は、社会の変化を促す有効な手段のひとつであると思う一方で、自分もまたこの状況を作り出している一員であり、この状況そのものも、抗議対象も、私たちの鏡だと考える必要があると思つています。私たち自らが自らと対峙していかないと、再び同じようなことが繰り返される結果となる。それで、気づきに繋がることに力を注ぎたいと思いました。

表面には浮かび上がつてこないもの、声をあげて主張しにくいこと、吹けば簡単に失われてしまうようなささやかなもの、零れ落ちてしまうもの、そのようなものたちをすくいあげるような作業を通して、再考していきたくて考えました。

分断のことで考えるのは、共生の模索についてです。今年の秋、阪神淡路大震災の被災地でもある西宮の船坂ビエンナーレで「ふねやまにのぼる」という作品を作家三名で作りました。これは、人が生きていくことやふたつの大震災の記憶を重ね、えびす信仰を共生形のひとつと捉え、放射能や非日常、混ざり合ったコミュニティなどの様々な変化（異物）とともにある今を再考していくような作品でもあるのですが、放射能や混ざり合ったコミュニティ間の問題だけでなく、身近なこと、たとえば人と人も異物同士、異物という観点に立つと、放射性物質も人も自然物だからか得てして似ているような気もします。距離をとる、覆う、排除する、無いものとする（逃避）、有効利用する、被爆を受け入れる、実験とする、諦観する、同化してしまふ、等々、異物をどう受け入れるか、どううまくつきあつていくのかを模索したいと考えていました。

そんな時に、土を削り取る除染は象徴的に私の目には映りました。身を削り、血が流れるような思いを持ちながらも愛情をかけて作物を育て、放射能のある世界との共生を試みる福島の姿。結婚とか、引越しも同じことが言えるかもしれません。その人が置か

れた環境の中で、そのしんどさや違和感、どうにも出来ないことを抱えて歩いていくのが、人生だったりする。その福島のを作品の中に留め考えてみたいと思ひ、要素として取り入れてみました。

この地球上で、日本で、福島で、大阪で、どういう生き方をしたらいいのか、在り方や捉え方、距離を探るなど、様々ある共生から自然と湧き起こる微かな変化と、そこからの育みを丁寧に見つめ直し、積み重ねていくことが大切なのではないかと思つています。

強い自己主張をする断絶が生まれていってしまうことがあります。大きなうねりとなる事で、変革が促されるメリットはあるものの、その陰で発言出来なくなつて行く人々、マイノリティの発生や、そこに対立や溝が生まれてしまつたりもします。小さなところに目を移せば、それぞれに共通項もあり、違う事もあるのが普通であり、抱えている想いも問題も価値観も異なるのが当然で、何か起きればそれぞれの反応をし、それぞれの立ち位置で精一杯の事をするだけです。とかく放射能の問題は、どんな結果となるのか現時点では分からないことが多く難しいのですが、そういったことへの理解があつた上で括りやイメージを一旦外し、より豊かな対話や今後が生まれればと願つていきます。

お話・藤城光（いわき市在住。美術家。「PRAY + LIFE」インタビュアー、構成・小手川望

□藤城光さんプロフィール：

埼玉大学教養学部卒。デザインやイラストの仕事しながら、作品制作をしている。いわき市に移住後、土や砂に刻みこまれてゆくものに惹かれ作品に用いている。二〇一〇年展『ぬけあい』（ROCKET / 東京）開催。二〇一一年春、聴き書きのプロジェクト「PRAY + LIFE」を始める。 <http://www.star-fish.jp> [ <http://praylife.net> ]

□PRAY+LIFE プロジェクト

ふくしまの体験を経て、その記憶や想いをのこすことを目的に二〇一一年四月よりスタート。在住のいわき市の住民を中心に、ふくしまの被災に関わる人の体験を聴き、その声を冊子やインターネットで公開している。それぞれの事情や価値観を抱えながらそれぞれの人生を生きている人々の「声」を拾い上げることで、相互に理解し、ともに考えるきっかけをつくる。ウェブサイトでは英語版も公開。さまざま「声」から感じることを一つひとつ問ひながら、これからの私たちのあり方を探り、長期にわたると予想されるこの状況に対し、より広い理解と、今後数十年継続しての蓄積を目指している。

## 「震災トラウマ復興ストレス」読書会

コクルーム向かいのカマンメディアセンターで、毎月一回、精神科医の宮地尚子さんが書かれた岩波ブックレットを読んでいます。スケジュールは以下で確認できます。  
<http://www.kama-media.org>

わたしたちは、この冊子を発行するために一緒に作ってくれる方、取材に協力してくれる方、情報提供をしてくれる方援助してくれる方を求めています！

問い合わせ：koteegawanozomi@gmail.com

またどこかでね関西版 第一号 発行日：2012年12月1日

発行：避難生活ききとりプロジェクト

〒557-0001 大阪府大阪市西成区山王1丁目15-11

(インフォショップ・カフェ・コクルーム内)

編集人：小手川、茂木秀之、桐畑未来

助成：AIBO 基金プロジェクト

協力：NPO 法人こえとことばとこころの部屋、PRAY + LIFE プロジェクト

KASHIGEL? (イラスト)

